



先生が変わると授業も変わっていきんだね！ ～公立小・中学校の英語教育

The Feature of This Month

2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、「英語教育」が注目されています。文部科学省は、今後の英語教育の改善・充実方策について、「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」をまとめ、2020年を見据え、小・中・高を通じた新たな英語教育改革を実施できるよう、検討を進めています。東京都も中・高生が英語だけで外国人講師と接し、生きた英語を学ぶ、「英語村」を開設します。

今号では、3カ月間の東京都の「外国語(英語)科教員の海外派遣研修」に参加した市立中学校の英語教師に話を伺い、さらに、小学校の外国語活動を紹介します。

< どのような研修を受けてきましたか >

- 司会 加藤先生と松本先生はオーストラリアで同じ研修を受けましたね。
- 加藤 はい。高校の教員と中学校の教員を対象とするクラスが2クラスずつありました。午前は英語の教授法について、午後は現地の大学の講師から英会話や文法を学び、今後の自分の授業にどのように生かしていくか、教員同士でグループワークを行いました。
- 司会 当然、授業はオールイングリッシュですね。
- 加藤 そうです。分かりやすく、かみ砕いて話してくれたので聞き取りやすい授業でした。実際の英語の授業で生徒が分からないと言った時に、英語でどのように伝えたら良いかということも勉強になりました。
- 司会 現地の学校で実際に教えたそうですね。
- 松本 高校に行ってT2で入り、英語ができない子どもたちに英語で教えたりしました。



T1はteacher(指導者1)、T2はteacher2のことです。T1とT2は二人で授業に入り、team teachingチームティーチングを行って、授業の効果を高めています。

○司会 英語ができない子どもに英語で教えるというのは興味深いですね。英語がセカンドランゲージになる、つまり英語が母国語ではない子どもたちに教えていたんですか。

○松本 そうする場合もあれば、現地の高校に派遣される場合もありました。

○司会 セカンドランゲージとして学びに来る子どもたちは、日本の生徒とは違いますか。

○松本 セカンドランゲージの子どもたちはアジア系が多く、日本人に近い感じでした。英語を習得していく上で必要なサポートは、日本の学校の子どもの場合と同じなので、教え方は一緒です。大きく違うのは、日本の子どもたちよりも真剣に英語を身に付けたいと生きていけないというハングリー精神があるので、吸収しようという意欲がとても高いことです。

○藤勝 アメリカでの研修内容はだいぶ違います。派遣された83人を四つのクラスに分け、そのうち二つのクラスはTEFL(Teaching English as Foreign Language)という、外国語としての英語を教える技術と知識の資格が取れるコースでした。英語を話す国に住んでセカンドランゲージとして勉強するのではなく、完全に自分たちの生活範囲に英語がない子どもたちにどのように英語を習得させるのか、というものです。そういう中・高生年代の子どもたちにとってはどのようなハードルがあるのか、それを乗り越えるにはどのようなアクティビティ(やり取り・活動)が考えられるかについて、グループやクラス内で実践するという内容でした。

○司会 まさに日本の子どもたちにどのように教えていけば良いのか、というプログラムになりますね。

○藤勝 アメリカではTESL(Teaching English as Second Language)ではなく、TEFLと言っていました、その通りだと思います。

○松本 現地の学校ではパソコンやスクリーン、スマートボードがあって、それを使って授業をしていくのが当たり前でした。教える側も準備が楽ですし、日本の授業でもたまにテレビを使うと、子どもたちの食いつきが違います。スクリーンとパソコンがあれば、視覚と聴覚から英語を取り入れられるのにとっています。

○藤勝 アメリカの先生方はそれぞれ自分の教室を持っていて、そこに生徒が移動し

てくるシステムです。その部屋には教師が掲示物を自由に貼ることができます。日本では10分休みに準備しなければならないので、時間的に難しいです。私は、子どもに何かを見せたいときは図書室に連れていきます。朝のうちに図書室にテレビを出して、パソコンもつないだ状態にしておきます。しかし専用の部屋ではないため、生徒の集中力を維持するのが大変です。

アメリカではVARKパーク(Visual Audio Reading Kinetic)という教え方を学びました。子どもによってどういったチャンネルというか、どういったソースをもとに勉強しやすいのかは異なります。視覚的に押さえるのが得意な子もいれば、聞くことで理解が進む子、読むことから入るのが得意な子、ある程度体を動かしながらのほうが得意な子どももいます。しかし、ビデオ機器やパワーポイントなどは駆使したほうが良いとは思いますが、普通の教室でできるのはオーディオとリーディングぐらいです。

< 帰国後、授業をどう変えましたか >

○藤勝 これまでは新しい文法を教える際に、子どもの英語レベルにかかわらず、しかし応用がきき、ある程度のレベルのものでくれる型を用意し、単語を入れ替えてスピーチするなどを行って来ました。今は「かっちり」教えるのではなく、「こういうことをやってほしい」という説明だけをして、後は生徒に任せています。少しのミスはよしとすることが、自分の中ではとても新しい方向性になりました。これまでは間違えた英語を話させてはいけないという強い思いがあったので、発音も文法も細かく指導して来ました。生徒が書いた作文もすぐ時間をかけて添削していたので、返却に時間がかかっていました。しかし、もっと自由に思いを書くことを重視し、まずは相手に思いが伝われば良いんだということに重視した指導に変えました。そういうことが研修を通して分かったと言いますか、そこが反省というか、今までとは違うと感じたところです。

○司会 「ある程度のミスを許す」というところで、加藤先生もうなずかれていますね。

○加藤 今の日本の教育は「生きる力を育む」ためにいろいろな教育活動を行っていますが、英語も生きるための手段の一つなのだということを感じました。大人でも漢字を間違えたり、言葉を間違えて使ったりというのはよくありますし、英語を学んでいく子どもたちが間違えるのは当たり前前だと思います。完璧を目指すべきですが、間違えるのが怖いからといって委縮させるのが一番良くないと思いました。

○司会 「ハングリー精神を持つ」という発言がありました。そういう意識を持つことが難しい日本ではどのように教えていったら良いと思いますか。

○松本 「ハングリー精神」を「生きるための手段」ととらえたら良いと思います。研修ではチラシやレストランのメニューなど日常生活にあるものを教材として使って、「英語はコミュニケーションを取るための手段の一つ」ということに重きを置いていました。今は、クラスで私が使う英語の量は確実に増えているし、子どもたちにも「言えることは英語で」と、伝えていきます。

手を挙げて、自分に当ててほしいときにはLet me tryレットミートライと言わせています。自分が持っている情報を使って、多少間違えてもいいから使ってみる。必要な情報を聞き出したり、気持ちを伝えてみたり、英語で何かを生み出す活動に重きを置いてやってきています。

○藤勝 単純にお互いが知っている情報を、例えば教科書のダイアログ(dialogue・問答)の会話文をやり取りする練習ではなく、やり取りすることによって情報が行き来して何かを得られるような、meaningfulミーニングフル(意味のある)な活動をどのようにつくっていくかを考えています。自分と相手を持っている情報量や内容の違いを、話し合いによって差を埋めていく活動を行っていきたくと思います。ただし、われわれは教科以外の校務もこなさなければならないので、時間をかけず最大の効果を上げなくてはなりません。パソコン、テレビ、プロジェクターなどを使える機会が多くなれば良いと思います。

○加藤 帰国してまずやったことは、私も話す英語量を増やすことでした。教科書に出てくる新しい単語も、今は生徒が分かるような英語で説明しています。そういう説明(2面に続く)

対談に参加された先生

市立西中学校・加藤祐紀教諭(4年目・中学2年生を担当)。研修先はオーストラリア。中学時代の英語教師が洋楽や映画などの生きた素材を用いて教えてくれて、英語が好きになりました。英語の授業のやり方を学ぶには出会いが必要だと思い、研修に参加しました。



市立大門中学校・藤勝大介教諭(7年目・中学3年生を担当)。派遣先はアメリカ合衆国。英語教師になるのは大学に入ってから決めました。英語の教え方を変えなければならぬという危機感もあったので、研修に参加しました。



市立大門中学校・松本 蘭教諭(4年目・中学2年生を担当)。派遣先はオーストラリア。英語教師になったのは、中学時代の英語教師によるオールイングリッシュの授業にここが良かったからです。今回の研修は周りのタイミングも良かったので参加しました。

